

平成30年度第1回北海道総合教育会議 議事録

1 日時

平成30年6月20日（水）午後2時00分開会

2 場所

センチュリーロイヤルホテル 3階 エレガンス

3 構成員の出席状況

(1) 出席

高橋知事、佐藤教育長、鶴羽委員、末岡委員、田澤委員、橋場委員、山本委員

4 会議に出席した学識経験を有する者

大阪総合保育大学 学長 大方 美香 氏

5 議事等

北海道における幼児教育の振興について

6 議事録

別紙のとおり

1. 開会

○事務局（小野塚総合政策部長） ただ今から、平成30年度第1回北海道総合教育会議を開催いたします。本日の議題は、「北海道における幼児教育の振興について」としております。道におきましては、現在、「北海道幼児教育振興基本方針」の策定を進めておりますことから、その素案について、ご説明をいたしますとともに、有識者の方からご講演をいただき、議論を深められるように、今回、議題としたところでございます。

本日は、会議を構成する知事と教育委員会の皆様に加えまして、幼児教育に関する学識経験者として大阪総合保育大学の大方学長をお迎えしております。幼児期からの幼児教育について、専門的な見地からご講演をいただきたいと考えております。

大方先生におかれましては、大変ご多忙の中、また、一昨日、関西で大きな地震がありました中で、本日、遠路お越しをいただきまして、本当にありがとうございます。

また、本日は、幼児教育を担当しております坂本教育部長、それから保健福祉部の栗井少子高齢化対策監も出席しております。なお、辻副知事につきましては、当初出席を予定しておりましたけれども、用務のため本日は欠席となっております。どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、会議に入ります前に資料の確認をさせていただきたいと存じます。会議の次第、それから出席者名簿、そして配席図のほかに、資料の1-1といたしまして、仮称ということで北海道幼児教育振興基本方針素案の概要について、資料の1-2といたしまして、仮称北海道幼児教育振興基本方針素案、そして資料の2として、大方先生の説明資料となっております。過不足などございましたらお申し出をいただければと思いますので、よろしいでしょうか。ありがとうございます。なおこの他、教育委員の皆様が発言の際には、パワーポイントを用いる場合がございますのでよろしくお願いいたします。それでは、議事に入らせていただきます。議長は高橋知事にお願いいたします。

2. 議事等

○高橋知事 それでは、議長を務めさせていただきます。まず、会議に先立ちまして、一昨日の大阪府北部を震源とする地震により、5名の方々が亡くなられましたほか、多くの負傷者が出ていることに対し、心からお見舞いを申し上げる次第であります。犠牲となられた方の中には、登校中の小学校4年生の女子児童もおられたところであり、将来のある若い命が奪われる結果となったことは、誠に残念であります。心からお悔やみを申し上げます。では、会議に入りますが、本日は幼児教育の振興について意見交換したいと考えております。始めに、北海道幼児教育振興基本方針素案ということで、事務局からご説明を願います。

○坂本教育部長 私のほうから、仮称ではございますけれども、北海道幼児教育振興基本方針、その素案についてご説明申し上げます。お手元に資料1-1として素案の概要、資料の1-2といたしまして素案の本文をお配りしております。資料1-2の表紙、下段の

ほうに北海道及び北海道教育委員会の連名で記載しておりますように、本方針をはじめ、幼児教育に関わります諸施策は、知事部局及び教育庁の複数の関係部局が連携しながら進めているところでございます。

それでは、資料1-1、概要に沿って説明をさせていただきます。はじめに、策定の趣旨についてでございますが、丸の3つ目にアンダーラインが引いてございます。この方針は本道の広域性を踏まえ、すべての幼児教育施設が質の高い教育を提供できるよう、教員や保育士などの研修機会の確保や、助言体制をはじめ、家庭や地域と多様な場における幼児教育の充実のための基本的な方向性を示し、オール北海道で幼児教育の振興に取り組むため策定するものでございます。

次に、方針の性格についてでございますが、本方針は、昨年度総合教育会議で決定いたしました「北海道総合教育大綱」をはじめ、「北海道教育推進計画」や「北の大地☆子ども未来づくり北海道計画」等と連携しながら進めるものでございます。なお、計画期間につきましては、本年3月に策定いたしました「北海道教育推進計画」の終了年度に合わせまして、来年度、平成31年度から34年度までの4年間といたしております。

続きまして、本道の幼児教育の現状と課題についてでございますが、4点掲げさせていただきました。1点目、質の向上に向け、幼稚園教諭、保育教諭、保育士等の保育者及び教員間等の連携や幼児教育施設及び小学校間における教育課程の円滑な接続が必要であること。2点目、特に小規模自治体が多い本道の特徴でございますが、幼児教育施設が少ないということで、他の施設の保育者と日常的に交流する機会が不足していることや、身近な地域で学ぶことのできる機会が必要であること。3点目、子育てについての悩みや不安を抱える家庭が、身近に相談したり学んだりする機会等が必要であること。4点目、道として研修など、幼児教育施設への支援体制づくりが必要でありますとともに、道及び市町村におきましては、幼稚園、保育所、認定こども園の所管が複数の部局にまたがっている場合があり、一体となって施策に取り組む必要があること。これら4点を本道の主な課題として認識しているところでございます。

次に、裏面をご覧ください。幼児教育振興の方向性についてでございますが、ただいま申し上げました本道の現状と課題を踏まえまして、北海道といたしまして、3点、方向性を示させていただきます。1点目、幼児教育施設等の組織としての取組の充実。2点目、保育者の資質能力の向上。3点目、家庭や地域における教育・保育の充実。という3つの目指す方向性を柱に、幼児教育の振興を支える体制づくりを進めていくこととしております。

続きまして、推進体制でございますが、幼児教育の充実に向けた取組は、北海道はもちろん、市町村、幼児教育施設、小学校、特別支援学校、家庭、地域などが、それぞれの役割を果たしながら、連携して幼児教育の振興を図ることといたしております。

最後に、施策体系及び施策項目でございます。先ほどの方向性3点に合わせまして、方向性1つ目について、幼児教育施設等における組織としての充実に関しましては、例えば

特別支援や幼保小連携の推進などについて具体的な施策を置き、方向性2の保育者の資質能力の向上に関しましては、人材の養成・確保、研修の充実など、方向性3の家庭や地域における教育・保育の充実に関しましては、家庭の教育力や子育て支援などを置き、北海道としてそれらの施策を進めるための体制整備について最後にまとめているところがございます。この施策項目の具体的なイメージを持っていただくため、資料1-2の36ページをご覧いただきたいと思うのですが、これまでも総合教育会議で話題となっております研修の項目を紹介させていただきます。

左のページには、本施策の現状・課題として、例えば、黒丸の3つ目、週6日開所の施設等が多く参加促進の工夫が必要であること。という課題に対しまして、施策の方向性として、黒四角の2つ目、保育者の参加しやすい研修体制の整備などを記載しているところがございます。また、右ページの施策の展開につきましては、主な教育主体でございます北海道・北海道教育委員会、そして市町村・市町村教育委員会、さらに幼児教育施設がそれぞれ取り組むべきことを記載しているところがございます。

以上、基本方針の素案について説明させていただきました。なお、この素案につきましては、明日以降、パブリック・コメント等を通じまして、広く道民の皆様から御意見を伺い、本方針の策定に向けてさらに検討を進め、本年末を目途に基本方針を決定したいと考えております。以上でございます。よろしくお願いいたします。

○高橋知事 ありがとうございます。続きまして、乳児期からの幼児教育についてと題しまして、大方先生からご講演をいただきたいと思いますが、これに先立ちまして、事務局から大方先生の略歴についてご紹介いたします。

○篠原総合教育推進室長 本日も講演をいただきます、大方美香先生の略歴を紹介させていただきます。大方先生は、聖和大学教育学部をご卒業後、幼稚園勤務を経験され、聖和大学大学院で幼児教育を専攻されまして、教育学修士を取得されました。城南女子短期大学、大阪総合保育大学で教授として勤務をされ、大阪総合保育大学では、児童保育学部長としてお勤めをされた後、現在、同大学の学長として、ご活躍をされております。

大方先生は、保育学、乳幼児教育学を専門とされておりまして、これまで、「厚生労働省社会保障審議会保育専門委員会委員」、文部科学省の「中央教育審議会教育課程部会幼児教育部会委員」等の要職を歴任されるほか、自宅を開放して地域の子育てサロン「ぶらんこ」を主宰されるなど幅広くご活躍をされており、本日は、大変ご多忙の中、本会議にご出席をいただきました。

大方先生からの貴重なご助言をいただきながら、本道における幼児教育の振興についての議論を深めてまいりたいと考えておりますので、限られた時間ではありますが、どうぞよろしくお願いいたします。

○高橋知事 それでは、大方先生よろしくお願いいたします。

○大方学長 皆さま、こんにちは。ただ今ご紹介に預かりました大阪総合保育大学の大方と申します。よろしくお願いいたします。この場にお呼びいただきまして、ご縁をいただ

きましたこと、また先ほど知事からから言っていただきましたように、大阪はただいま地震の後です。今朝も余震の中、北海道まで来れるのかと思いつつ、今日こうしてここに来ることができましたことを心より感謝しながら、そして地元の皆様のことを想いつつ、貴重な時間を共に過ごしていきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願ひしたいと思ひます。

25分という非常に限られた時間ですがよろしくお願ひします。まずは、この会議が、知事や教育長をはじめ、皆様が一同に会して「幼児教育について語る」ということに、まずは敬意を表したいと思ひます。全国でも知事、教育長自らが幼児教育に関心を持っていただくということはあるがたいことです。やはり行政のトップの方々が関心を持っていただかないと、全ては実現できず、敬意を表して話をしたいと思ひています。

乳児期からの幼児教育ということでございますが、まず知っていただきたいのは、児童福祉法そのものが変わっていることです。「保育に欠ける」という福祉的な視点から、今は「保育を必要とする」というように、まず前提が変わっています。3歳未満の子どもに関しましては、保育所等が福祉として引き受けてきたという経緯があります。これは介護をお考えになればよくわかることです。私は、大方の嫁として5人介護が終わりましたが、30年前はまだ介護保険もございませんでした。奈良に住んでいるのですが、嫁の仕事という雰囲気でした。それが、制度が変わり、今や社会全体で介護を支えるという時代になりました。これはお金があるとかないとかという問題ではなく、みんなが介護を必要とする時代になったからです。子育てに関しても、社会全体として保育を必要とする方々が圧倒的に増えてきた。その中で、待機児童の問題や人手不足の問題が発生しています。

ですから、子育て支援と乳児の問題、幼児教育の問題は、制度としては別々の問題ですが、根っこのところでは繋がっているということをお考えいただけたらと思ひます。

3歳未満の保育は、非認知的能力、社会情動的スキルが言われています。これは海外の経済学者の研究ですが、3歳未満に母子でなくても情をかけてくれる人との出会いが大切であり、（せめて名前だけでも呼んでくださるような方との出会いが地域であったり、家庭であったり、それはおじいちゃん、おばあちゃんでも、お店屋さんであっても構わないのですが）誰か一人でもそういう出会いがあったならば、40歳過ぎてから塀の向こうに行く確率が低いという結果が出てきました。日本も東京大学を中心として、ようやく乳児期、幼児期ということの追跡調査が始まっています。「三つ子の魂百まで」という言葉は、日本にあった素敵な言葉ですが、女性に関して言うなら、子育てはお母さんの仕事という若干、決めつけられてしまったようなことから言わなくなってきたという経緯があります。けれども、3歳未満が大切であるということは、この国の文化の中にあり、それは子守りや託児ということではなく、人間が人間になっていくときに、人の情愛というものの大切さです。情というもの、これは人と人との出会いと関係性の中で育まれるのですが、（北海道はまだ大丈夫かもしれませんが）、サザエさん家のような時代の昭和の家族像、お父さん、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃん、兄弟姉妹がいるような家族の中で育

つ子どものイメージです。子どもは、地域の方々や学校に行く途中にもご近所の方々から声をかけてもらったり、「大きくなったね」というように声をかけてもらったりしていました。買い物に行けばそこでまた声をかけてもらったり、という対話が存在していました。

現在は、そのような生活が困難となり、少子化の中で、子どもは一体、人間らしくなる育ちの時期にどこで人に出会うのか、情愛はいつどこで育まれるのか。一方、保育所はこの5～6年、あつという間に朝7時～晩7時、12時間保育が当たり前になっています。1日12時間の保育は、単純に考えて家は寝るだけに近い状態です。これは、保育が必要悪ではなく、その事実に基づいて保育をどう考えるかということと、一時預かりのような時代ではもうなくなっているということです。就学前の乳幼児教育として育ちの保障をするカリキュラム等も考えていかないと、基本的信頼感のもとより、この時期に育つべき人との関係を通した言葉の発達、身体性の発達、精神性の発達、あらゆる、身体性が育ちにくくなっているという事実を踏まえなければいけないということです。保育所保育指針の中では、3歳未満が位置付けられ、「温かく応答的に」という言葉が出てきます。では、今や誰が温かく応答的に0歳の時から働きかけてくれるのか。ということが、子育てとしても求められ、保育としても求められ、幼稚園としても就学前、保育としても、保育所としても、こども園としても、あらゆるところで丁寧に見ておかなかつたら、小学校に行きました、じゃあそこからいきなり授業です。それまでに育っていない積み残しがあるということですね。これでは困るわけです。

今はいろいろな小学校でも、始まっている中で、非常に問題のあるところでは、単純に言いまして、読めます、書けますという子どもは多いのです。保護者の方も小学校に行くまでに、字が読める書けるというのは、ある意味外さないというくらいになっています。ところが、読めるのだけれど、書けるのだけれど、いわゆるイメージが出来ない、意味がわからない、というところのギャップが出てきています。生活科が今注目されていますが、例えば、「この中から掃除道具について、掃除に必要なものに丸をつけましょう。」と仮に言われたとした時に、例えば、「ルンバを見たことはある。でも箒は見たことがない。」という子どもさんがいたらですね、全くもって繋がってこないことになります。じゃあ箒にセットはちりとりということになるのですが、箒とちりとりがセットって、あつたでしょう、見たでしょう、と言ったとしても、その時誰か側に大人がいて、これは箒だよ、これはちりとりだよ、これとこれはセットなんだよと、こういう時に使う道具なんだよ。それは勉強して学ぶことでも授業で習うことでもなく、就学前の0歳からの日々の生活体験の中で、少なくとも私達は、気がつけば身につけていたこと、気がつけば知っていたようなことですね。でも、その時に、誰か人との心地良い風景があり、情景があり、人の情の中で掃除している場面が思い出されたり、「こうやってするんだよ、手伝って」と言ってもらったりという中で育まれてきたことなのです。それを今は、教育的配慮でもって考えていかないと、意識しなければどんどん消えていき、子ども達自身も自分で自己開発できる年齢ではないだけに、気がつけば小学校の年齢になりました、では、非常に困難。スタ

ートカリキュラムと言われますが、読めるけれど、書けるけれど、式はあるけれど、意味がわからない。という子どもの困り感ですね。いきなりそれを発達障害、特別支援というふうに区別されて決めつけられても困るけれど、だからといって結果、症状としては非常に似たような状態になるような可能性も出てくる。そんなことも少しイメージしていただけたらと思います。

そういう面で、ここにちょっと載っていますが、これは保育者のことですが、言葉ということ、言語刺激ということが非常に重要な位置付けになっているということもご理解いただけたらと思います。

なぜ、言葉かというと、私達が考えなくてはならないのは、少なくとも子どもが変わったのではなく、大人の生活が変わったという中における、この幼児教育、特にアクティブラーニングと大学まで言われていますが、そもそも幼児教育は生活・活動・遊びの中で体験をしていくという時期ですね。今は大学まで一斉授業やめましょう、アクティブラーニング、対話を増やしてくださいと言われる。その背景は何かと言うと、気がつけば大人の生活はどんどん便利になってきたのだけれど、子どもの育ちにとって、さてどうかということは今考えないとなりません。簡単に言うと、フェイスブックにLINEにメールにユーチューブ、となってきた時に、これは大人にとって素晴らしい道具であるということ間違いのないわけです。けれども、もしもという電話をしていた時代は、横にいた子ども達は、そこで人の言葉を聞いた。相手によって、しゃべり方が違うという体験もした。難しい言葉だけれど、おじいちゃんが言う言葉とおばあちゃんが言う言葉と、サザエさん家のような家柄は、小学校のお兄ちゃんが言う言葉と、ワカメちゃんが言う言葉と、性差も含めて、いろいろな言葉を、覚えようと思わなくても日常生活で見聞きし、身につけてきたのですね。いろいろな道具の操作と言っても、家族の中で、地域の人と一緒にいる中で、気がつけば真似をしながら育ってきたということです。幼児教育は、基本は真似、模倣が0歳から始まるわけですが、真似をするモデルである大人の生活が、どんどん会話をしなくなり、ダイヤルでこう（ダイヤルを回す様子）していた時の育ち方と、今、1歳でもこう（スマホなどの画面を人差し指でスワイプする様子）します。つまり、こう（ダイヤルを回）していた時というのは、単純に見えるけれども、こう手首を動かすわけです。そうすると平仮名を書く前に、丸を書く前に、手首を育てるというような身体性、身体性の育ちと言ったら走ったりとか、歩いたとか、大きな区分がわかりやすいですが、微細な筋肉も全て人としての育ちが必要で、介護に気づけばわかりますが、作業療法、医学療法というのは、逆に育ってきたことをリハビリを兼ねることによって退化しないようにするのがリハビリですが、子どもはリハビリではなく育ちの保証として、元々ふにゃふにゃで生まれてきた身体を使うことによって、声を出すということが面白くなって、だいたい3歳くらいまでにまず人間らしくなってくる、その上での3歳以上で幼児教育ということが、遊びが育つわけですが、その前のところから今は非常に育ちにくい時代になっているということです。

ダイヤルを回していた時は、勝手に真似をして、1歳でちょうど1の穴につっこんで回

してくれました。もしもしという言葉が発する。もう1～2歳でも言葉を出しなさいと言わなくても、もしもしという真似からもしもし遊びがあり、その中で耳で聞いて人の声を聞き、記憶するという脳に刺激が与えられ、これ何で、おじいちゃんの顔はないのに、おじいちゃんの声がする。不思議やなあ。ということで心地よく脳の思考力に刺激が与えられ、誰や？と、あ、おじいちゃんやと。そのうち記憶して覚えるということが繋がっていったわけですね。それが今は、良くも悪くもこう（スマホを触る様子）になりました。こないだ絵本で1歳はスマホの動きを真似していました。言葉は存在せず、手首を動かすということは存在せず、聞くということも存在せず、画面を見るということの真似をするわけです。それが悪いわけではありません。ただ、そういった生活が変わってきた事実に基づいて、何が育ちにくくなっているかということ私達大人が専門的に分析をし、それを、今家庭でやりなさいと言われたって、難しいわけですから、私達が子どもの育ちってこういうことが大事だよと、ここは育ちにくいよ、じゃあそれを保育の中で、遊びの中で、どう取り入れて育てていくのかということが大事で、しんどい子どもさんは、逆に言うと、子ども理解として、幼稚園にくるまで保育園にくるまで、これは保護者批判では困ります。保護者は一生懸命したつもりだけれども、0歳から1歳まで何をしなければいけないか、おむつを替える、離乳食を食べる、抱っこする、そこまではわかりやすいです。それ以外何をするって、ほとんどわからないです。あらゆる本を見ても、そこをどうするかということは、なかなか書いていない部分があって、難しいのですね。

そうすると、触っちゃだめ、です。今、出産祝いのワースト1は、積み木になっています。あのような、素敵と思って私もよくお祝いあげましたが、これは嫌がられる代物だと最近わかりました。つまり、音がする、片付けるのが面倒くさい、重い、床に傷がつく、一人で遊べない、がちがちいう、簡単に言えばそういうことですよね。子育てで苦しんで大変なのに、アプリがあったら、ピッと押せば鬼が出てきてしつけをしてくれる、泣き止んでくれる、ずっと見てくれる、しゃべらない、動かない、ですよね。つまり、それはひっくり返せば、育ちにくくしているのだけれど、子育てをする人にとってはこれほど素晴らしい魔法の道具はなく、ですから取り上げるだけでは上手くいくわけではなく、ただ実際は、なぜ積み木は良かったのと、積み木の宣伝ではありません、やわらかいものだけでは手先は育たないわけです。固い物を持つとすると、指先に力が入り、積もうとした時に、一生懸命、目と手の競合ということが上手く育ち、そのうちに、積んだものにイメージをし、こんなの作りたいなというイメージに基づいて今度は積むようになり、これが年齢発達によって、外から見れば同じような遊びでも、偶然性に名前をつけるものから、作りたいという目標に向かって積んでいくと、その中で何回も上手くいなくなると、葛藤しながらということ乗り越えるのですね。こうしたことが、日々の生活、遊びの中でありました。そういうことを繰り返した上で、小学校の学びとの出会いがあったわけです。形はもちろんその中にあり、数との出会いもあったわけですね。そういうことが今は、どんどんなくなり、触ったこともない子どもがどんどん増えていく、そうすると、ちょっと

簡単に書いていますが、生活があって遊びになるのが就学前、その中に、大人の働きかけがなければ、そこに心地よい大人がいなければ、勝手に遊びなさいと言って真似をするモデルがなければ、育つてこないわけで、単純に言えば横に書いている、総合的に全体的に人間が育つと言われているのは、一つの遊びの中にもいろいろな意味があるので、幼児教育の大事さ、ということも合わせてご理解ください。

小学校といっても、ここまであるわけです。ここまでの道のりへの子ども理解が、上手くいかないと、当然、累積赤字になってきて、身体は大きくなるけれども、この0歳の積み残しがあるということは、結果、大きくなればなるほど、誰もケアをしてくる人がいない形になってくるわけです。今いろいろな問題が出ていますが、あとはもう時間がないので申し上げますが、子育て支援を三十数年前から、それこそ自宅を開放してやってきて、その当時引きこもりの子どもさん、家庭内暴力の子どもさん、お父さんになってから苦しくなった方々、ご縁があって一緒に生活したり、お預かりしたりもありますけれども、やはりこう、タマネギの皮を剥くように見ていくと、これは保護者が、とか誰がではない、出会った大人全ての責任だと思いますが、誰も手を差し伸べられなかったのだなあということの中に、だんだんだんだん0に近いところ、やっぱり人との情動というような関係性のところに。そう言うときすぐお母さんもと、こうなるとまた困るわけです。いろいろな要因が絡みます。経済的なことももちろん、いろいろなことが絡むわけですが、そういう面で今言われているこの0歳からのスタートというのが非常に大事になってきます。資質・能力ということも今、小学校以上大学まで言われ、幼児教育はその基礎ということで今回記載されています。例えば、大きいトマトと小さいトマトがあります。知識としてわかります。では、「どっちを買いますか」ということが問題です。誰がその買い物をする時に、どっち買う？その判断は？ですね。大きい、小さいだけで判断ができるわけではない。つまり、お金、高いか安いとか、品物の質はどうかとか、今日はどんな料理に適用するのとか、何人分なのとかですね。その中には、あらゆる思考力の元であったりとか数のことであったりとか形であったり色つやであったりとか、生きる力の元は、買い物ということに大人と一緒にいるという場面は、生活なのだけれど、そういった基礎的な人としての生きる力の体験は、0歳からだいたい就学までに終わっていたことが、今は、ネットで買い物をする時代になりました。お金のやりとりも見ていません。物を盗っちゃいけないんだよと誰が言うのかなあ、買い物に行っていたら触っちゃだめだよ、物盗っちゃだめだよ、お金がいるんだよ、今や四角いカードでピッとすれば何でもいけると思う子もいます。そういったことも、抜けてきているよということに、これは私達も気がつかないと、誰が悪いのでもなく、大人の生活が変わった中で、必要なことは何を残すのか。小学校以上の、これ以上教科の中に詰め込んだって、これは難しいです。だからこそ、この遊び体験型の0歳から就学前の遊びの中で、体験の中で、活動の中で、どう上手く織り込んでいくのかということが、擬似的なこととして、あらゆる地域体験含めて、種をまいていかないと、上手く芽生えることができない時代になっている。ということにもお気づきい

ただけたらと思います。これは指針の中に0歳として記載されたこと。身近な人と気持ちが通じ合うものと関わり感性が健やかに伸び伸びと、自己に出会うということなのですが、たった3つのことが0発進ですが、では今、子育て支援、子育ての支援、文部省的に言う「の」が入り、厚生省的に言う「の」が入らないのです。この3つは、乳児が家庭で誰と出会って「気持ちが通じ合う」のか、子育てが難しいということは、「抱っこは誰がする」ということです。孤立無縁の保護者なら、乳児と一緒にいるだけでも呼吸困難な人がいます。虐待は、これだけ子育て支援をしても減らず、これだけ子育て情報があっても保護者は何を選んで良いのかむしろ混乱し、困っています。それでは、乳児の自己形成、「健やかに伸び伸び」とは、身体が育つ時、心が育つ時、大人が抱き上げて名前を呼んでくれるような人がいないと育ちません。すみません。皆様、僭越ではございますが、1秒だけちょっと天井を見てください。寝たきりってこのような状態です。では、少し、隣の人の顔を見てください。笑顔が出ます。介護でも寝たきりはいけないといわれています。当然、乳児の寝たきりはいけないわけです。誰か起こしてくれる人がいるのですが、それを家庭で誰がするのかです。一人だったら、他の家事もしなきゃいけない、家の介護もこれからはしなきゃいけない、いろんな仕事もしなきゃいけない、いまや乳児の顔を見て抱くというあたり前が困難な時代です。0歳で背筋力や腹筋力が育つのは、誰かが起こしてくれるからです。起こしてくれなかったら、身体はふにゃふにゃです。もちろん、人との関係性や情動も育ちません。ハイハイをしなかったらどうでしょうか。先に直立歩行をしたら。おしりだけのハイハイが流行っております。つまり、「手を出して触っちゃだめ」という家庭が多いのです。手を出さないということは、腕の筋力が育たないということです。単純です。そうするとおしりだけで移動したくなる。そのまま立ってしまったら当然顔から突っ込みます。幼稚園型の子どもさんには多いです。小学校でも今まで出来た競技が出来ない、腕立て伏せも上手くいかないというのは、0歳のハイハイから発達過程として抜けているということです。いつ腕の筋力が育ったかは、乳児は特訓ではありません。ハイハイがいかに大事か、この時期に腹筋も育ちます。腹筋も育つから排泄の自立がうまくいきます。介護をしても、寝たきりになれば腹筋が落ちて排泄がうまくいかなくなります。0歳の発達過程としてはあたり前の連続性の育ちがいかに重要かということを経験教育として、保育として伝えることが大切です。幼児教育は、子ども理解なくして成り立ちません。ハイハイは、「ハ」と「イ」と「ハ」と「イ」の4文字熟語ではないこと。「こういうことが育つ」、だから大事だという説明が必要です。「この時期にものを触らなかったら手が育たない」、「手首をぐるぐるするような行為、遊びをしないと、いきなりスプーンは持てないよ」と。「こういう手首の返しが育つためには、いろいろな遊び、物との出会いが大事だよ。」と。ある保護者の方がおっしゃいました。「2歳という暦年齢になったらしゃべると思っていた。」ので、2歳の誕生日の日（2歳の誕生日には、どの育児書を読んでも、おおむねしゃべると書いてあった。）、ビデオをセットして、決定的瞬間、最初の一音を録画しようと思いました。「パパと言うかな、ママと言うかな」と期待をしたわ

けです。しかし、その日、しゃべらなかったので、保護者は慌ててお医者様に行きました。お医者様は、「どこも悪くないですよ。」と言われました。いわゆる機能としてはどこも悪くない。お医者様は「家では何をしゃべっていますか？」と聞かれました。「しゃべらないから医者に来たのに何ていうことを言うのですか」とその保護者は苦情を言いました。つまり、「人間が話をするようになるためには、0歳から何をしなければいけないのか」、「大人の役割は何か」ということは、本には書いていない。今までは、考えなくても、子どもは家族や地域の中で生活しながら情が育まれ、しゃべりたくなる動機付けも、ものを触る動機付けもありました。その上で、3歳になり、幼児教育、小学校へと移行してきました。0歳は舌を動かす時期です。「いないいないばあ、べろべろばあ、」という、外から見れば「何をしているの」ということを、そうやってあやしてくれる（あやすは、愛するという言葉が語源）大人がいて、真似をする、舌が動く、舌が動くからしゃべる、笑う、表情筋が育ちました。表情筋が動かないと食材は噛めず、舌が動かないと滑舌が悪くなると介護ではいいですが、子どもはしゃべる人間になるために舌の動きが必要であるということです。この頃は、よだれかけも売れません。唾液がでません。乳児は、唾液でうるうるしていません。また、寝たきりでは困るのです。誰かが抱き起こさないと、ある日勝手に育ってきません。保護者は、「お願い寝ておいて」と親心から思います。じっとして寝ていてくれたほうが子育ては楽です。これから0歳からの子ども理解を考えないと、2歳になってから、「そんなことが大事だなんて本に書いていませんでした。」となります。「保護者は何をすることが子どもの育ちかを知りたかった。誰もそんなこと教えてくれなかった。」と言われました。「あらゆる本には、乳児期は静かに安全に清潔にと書いてある。」と。確かにそれも大事です。でも人の育ちとして大人の役割は何かがわからない。基本的な生活習慣だけではないのです。だからこそ、0歳からの乳幼児教育の発信、幼稚園も含めて、幼児教育の重要性は0歳からの子ども理解が大切であるということを知っていただけたらと思います。

最後になりますが、こうやって手を洗ったりするような、当たり前の場面も、言葉の育ちとして大切な生活です。「冷たいね」、「いい気持ちだね」と言ってくれる大人が必要です。「これは水だよ」と言わないと「水」という言葉との一致は生まれません。今やセンサーでピッとすれば勝手に水は出ます。幼稚園では、入園当初、水道の前で突っ立っている子がいました。水が出なくて蛇口を叩いていました。「ここでは、蛇口をひねらないと水はでない」ということを伝えて適応していきます。毎日家で蛇口をひねっていたら手首が動きます。していなかったら蛇口をひねるといふ身体性は育っていないともいえます。それは、発達の問題ではなく、日々の生活体験への適応であるという理解をしていただけたら、幼児教育の重要性と子ども理解に結びつくかと思えます。少しでも子ども理解に繋がればと思います。最後までご清聴ありがとうございました。

○高橋知事 ありがとうございました。今の大方先生のお話に対してさまざまなご質問等も委員の皆様方お有りになろうかと思えますが、ご質問も含めて、ご意見など順次、教育

委員の皆様方からご発言をお願いしたいと思います。それでは田澤委員をお願いします。

○田澤委員 教育委員の田澤です。素晴らしいお話をありがとうございました。今日、私はICTのお話をしたいなと思っていた中で、スマホの話をなさっていて、そのとおりと私も思いましたので、少しだけ意見を述べさせていただきますので、もしアドバイスとかコメントをいただけたらなというふうに思っております。

今、前のほうのスライドに出させていただいているのですが、幼児教育においてICTってどういう役割があるのだろうと、自分なりに考えてきました。私は本職のほうは、そういった関係なものですから、ぜひ教育に良い形でICTが関わればと思っております。

昨年の秋に、こういう記事が新聞で載って結構話題になりました。「0歳児の2割ほぼ毎日スマホ。4年前の調査から6倍に」といったような記事でして、これは調査の数字をうまくとって刺激的にしているだけで、ここからそのままとってはいけないと思うのですけれども、実際この時にスマホ育児という言葉が出てきたりとかしました。スマートフォンやタブレット型端末を育児に利用することという、定義ではないのですけれども、知育やしつけにアプリを親子で利用したりとか、子どもに端末を持たせて好きなように遊ばせる。先ほど先生の話にありましたように、忙しい時にちょっと持たせるみたいな。あるいは、親がスマートフォンを操作しながら子守をしているというか、全然視線がスマートフォンにいったりして、こういう育児は良くないよねというような話でございました。それで、実際ですね、ベネッセさんの調査においても、今の記事はそのベースになっているのがそのベネッセの調査なのですけれども、実際にやはり4年前から比べると本当にスマホを持っているお母さんが増えたということ。これはもう事実として受け止めなきゃいけない。保有率92.4%というふうになっておりますし、実際に子どもというか幼児が、ほとんど毎日接している割合というのは2割くらいあるというような、そういうデータも出ております。ただ一方で、親もやっぱりそればかり使わせてはいけないという意識もあり、また、メリットとして歌や踊りを楽しんだり、知識が豊かになるといったようなメリット面も出ておりますので、一概に悪く言えないのではないかなということで、私も幼児に向けたICTのどういう勉強の仕方やグッズがあるのかなということで、ちょっと見てみたところ、こういうのがありました。

3つほど、簡単に映像だけでご紹介します。これは、いわゆる子どもがスマホだけではなく、ICTというのは決して＝(イコール) スマホではないと、この子ども達は一緒にシートを敷いて遊んでいるのですけれども、パネルに右に行くとか左に行くという、こういうチップを置くだけで、実際の積み木が動いてくれるというものなのです。やはり、ICTっていろいろあるし、また、こういった絵本を読みながら、そのとおりにこういったものが動いて、子ども達が学ぶという可能性もやっぱりあるのであれば、こういった視点でICTを見てもらえたら良いなというような想いでこの映像を一つ見ておりました。もう一つこれは、子どもが絵本を描くツールでございまして、この絵本というのも、これは実際に子どもが作ったものらしいのですけれども、結構、何ていうのでしょうか、普通に

絵を描いているものの外に、なかなか出てこないですね、こんな風に流れ星をプログラミングをして、幼児ですよ。こういったものを作ることが出来て、子どもの感性が上手く活かされたら、流れ星がこうやって流れたりとか、おうちの中にも入ってくるよとか、そういうのがあるというのは面白いなというのが、これを見て思ったことです。あと、もう一つこういうのもありまして、ちょっとだけ見てみたいと思います。どういうものかという、見ていただいたほうが早いのですが、再生出来ませんと出ましたね。すみません、何かあるかもしれません。では、実は、ここの今のこの丸いやつが、マジックで書いた黒い線の上を歩いてくれるのです。ですから、大きな模造紙に子どもがいっぱい絵を描いた上を、こういう機械が動いていて、やっぱりスマホのこれだけでは絶対だめで、物とそれからそういったものを上手く組み合わせることで、教育が上手くいったら良いなというふうに思いました。これからは、読み書き、昔はそろばんだったのが、コンピューターが入って、読み書きパソコンなんて10年くらい言われていましたけれども、これからは、コンピューター教育も含めて、読み書き思考、というか考え方の時代になるのかな、どういう命令をしたら、どういう線を引いたら、この丸いのがどっちへ行くのかなとかと、そういうことは考えられるようになると良いなと思いました。

最後、幼児教育におけるICTの役割としては、子ども達が未来を生き抜く発想力、プログラミング思考と言ってしまっていますが、何かこう、自分で何かをどんどん発想できることが身についたら良いとか、保護者や保育士がやっぱりICTすごく急激だったので、子どもと一緒にそういったスキルや発想力を学ぶということにもなると良いとか、3つ目としては、先ほどの基本方針のほうでもありましたように、保育士の、保育の方も北海道広いですので、例えば、WEB会議を利用して大方先生の話が聴ければ、自分の保育に先ほどのような発想を入れられるというのは凄く良いのではないかなということを思いました。すみません、ちょっとざっと話してしまいましたが、もし何かコメントいただけたら嬉しいです。

○高橋知事 はい。ありがとうございます。他、どなたか。山本委員よろしくお願ひします。

○山本委員 大方先生、どうもありがとうございました。大変参考になり、勉強になりました。ありがとうございます。実は私、今月2日の土曜日に室蘭で開催された「幼児教育を語る会」というのを視察してまいりました。幼稚園、保育所、認定こども園のほか、小学校の先生も参加していましたね。総勢50名を超える、55名ほどだったと思いますけれども参加しておりました。内容的には、育ってほしい姿ですとか、あるいは小学校におけるスタートカリキュラムなどを題材にですね、それぞれの教育活動についてグループの協議を行っておりました。立場はそれぞれ違いますけれども、幼児教育施設の先生にあっては、自分のところだけでなくですね、他の施設の活動ですとか、あるいは引き継ぐ上で大切な小学校の活動を知る機会となって、本当に良かったのではないかなと思っております。特に小学校の先生にあっては、幼児教育施設の遊びを通した総合的な指導という

のを実際に垣間見る機会になったのではないかなと思っております。このような交流の機会を通して、当然、自らの施設の活動を改善したりだとか、あるいは自らの施設に求められる役割を理解したりするという事は、当然、子どもの成長にも繋がるということでもありますので、あらためて、教えることは学ぶことだなというふうに感じたところであります。このように、保育者の交流の重要性については、徐々に本道においても機運が醸成してきているのではないかなと思います。先ほど先生のお話の中で、昭和の時代というお話の中で、サザエさんの一家の話が出ておられました。今、祖父母含めて大家族はなかなかありませんし、ご近所のお話、お声がけというのは、なかなか見られなくなっています。昭和の時代には戻れませんので、そこを何か埋めていくような、人と出会う、あるいは言葉交わす、そして真似るとするのは先ほど先生のお話にもありましたけれども、こういうのを意図的にですね、やっていかなければだめなのかなという時代になっているかと思えます。家庭や地域における交流だったりとか、子どもへの声かけ、子どもが大人と交流すること、あるいは異年齢の子どもと交流することの重要性も併せて、これからどんどん発信していかなければならないのかなということをおあらためて感じたところでございます。ありがとうございました。

○高橋知事 他の委員の方いかがですか。はい、どうぞ橋場先生。

○橋場委員 大変わかりやすく、充実したお話でした。どうもありがとうございました。先生のお話の中で、目と手の協応、つまり、読めたり、書けたりするのだけれどもイメージがついていかないということが本当にそうなのだなと感じました。私は、昭和37年生まれなのですが、小さい時は、電話のダイヤルを回していましたし、積み木もありましたし、ブロックもいたずらして色々なものを作ったり、集合住宅の屋上にかまくら作って、最上階に雨漏りがして怒られたりとかですね、そういう色々なことをやって育ってきました。今の時代の子供達と違うのかなというような気がしています。特に、保護者に対する言語的刺戟、声かけの大事さですとか、温かく応答的な愛情を注ぐこと、情動の重要性というのをあらためて認識したところです。

これから、やはり、研修などを通じて、幼児の教育施設の教育の質は、上がっていくと思うのですが、昨今の報道にもみられる虐待の問題が最悪の場面ですが、子育てに関する悩みを持った人が相談する場所がないことで困っている方もたくさんおられるのでしょうか。私は刑事事件も仕事とする弁護士なのですが、AC（アダルトチャイルド）の問題で、自分の環境が相続されてしまう。親の持っている環境が、子どもにも移ってしまうという。生育歴を遡っていくと、昔そういうことがあったということが分かったということがありました。保護者が教育で悩んでいる時に、アクセスする場所、情報提供の場にどういったらどり着けるのかという観点も、すごく大事だと思います。

先生に一つだけ教えていただきたいことがあります。いわゆるアウトリーチ型、積極的に手を差し伸べていくという形の取組。先生から、ご自宅を開放されていろいろな子どもさん達を助けてあげたというお話があったのですが、このようなアウトリーチ型の取組と

いうもので特徴的なものがあれば、教えていただけますでしょうか。

○高橋知事 ありがとうございます。まとめて後から、大方先生にコメントをいただくということでよろしいでしょうか。では、はい、末岡先生どうぞ。よろしくお願いします。

○末岡委員 実は先月1歳の孫に積み木をプレゼントいたしました。それは長男夫婦からのリクエストでしたので、ほっとしております。それから、自分は小児科医なのですが、自分の病院の待合室にも積み木やブロックを置いてあります。本当に自由発想で子ども達がやって、その作った作品を診察室に持ってくることもあるのですよ。これなあに？と言ったら、何々だよと言って。ん？と思うこともありますけれども、その子の発想で作っているのかと、すごくほっとする気持ちになります。やはり、遊びってとても大事なということを先生のお話であらためて認識しております。それでやはりその遊びの重要性というものを幼児教育の施設だけではなく、保護者もしっかり認識しなければいけないのではないかなというふうに思います。それで先生もいろいろなところで行われているかと思しますので、今日はたくさんヒントを実はいただいたのですけれども、他にさらに付け加えるような形で、保護者をサポートするということに対して、何か簡単な事例ですとか、ポイント等をもう少し教えていただければ幸いかなと思っております。以上です。

○高橋知事 ありがとうございます。では鶴羽先生に最後に発言いただいた後、大方先生からお願いいたします。

○鶴羽委員 大方先生、今日はありがとうございました。私、お話を伺って、10年前を思い出しました。当時息子が4歳で、幼児教育ですとか子育て支援のことを本当に子育てで苦労しましたので、知りたくて、学びたくて、大学院に通いました。2年間を経て、また今日あらためて先生のお話を伺って、保護者が学ぶ機会というのは本当に必要なのだなというふうに思いました。大変なことはさせたくない、代わってあげたいと思うので、ひねるとかでも代わってやってあげていましたので、あれが大事なのだということを本当に早い時期に知ることが大事なのだなと思いました。

そんなことからいろいろな北海道各地の幼児教育施設の視察も行っていますが、私が知る限り一番視察が全国から含めて多いこども園が安平町にございます。先日そちらに伺ってきました。なんと、ペッパーくんが玄関にありました。これは、無償貸与ということで応募して得たということですが、大人気です。ここ、3年目の園なのですが、町以外から入園する子どもが激増しています。1年目は町以外からは0ですが、3年目の今は、28名増えました。隣の苫小牧市からは25名も。やはり親の口コミというのはすごいのだなと思いました。というのは、このICTの環境だけではなくて、自然の中での環境というのも素晴らしいということで、やはりこう頑張っている施設というところがあり、いろいろなところを見る、研修するということが大事なのだなと感じた瞬間でした。

そんな中で、道内各地いろいろ回る中で、やはり同じ地域の園の園長先生がおっしゃっているのが、人材不足です。今は国が行っていますが、自治体で力を入れ始めているのが、子育て支援員を増やしていこうということで、自治体のほうで研修していきましようとい

うことなのですが、この子育て支援員というのは、保育士を補助するという役割がありますので、保育士不足というところでも重大な力になる可能性を感じております。この私が子育て支援員の存在を知ったのが、北海道と教育委員会で一緒になって幼児教育をオール北海道でやっという協議会ができました。今までは、私立も幼稚園は幼稚園だけ、保育所は保育所だけ、認定こども園と、バラバラでやってきたことを一つにしましょうということで会議を行っています。その時に、皆さん方がおっしゃっていたことが、やはり情報がありがたいということでした。その時に情報いただいた中の一つが、旭川市で行われている子育て支援員の研修でした。私、衝撃的だったのですけれども、高校生が研修を受けていたということでした。もちろん受けているのは高校生もいれば主婦もいれば、60、70代の方もたくさんいらっしゃるのですけれども、高校生は法人への就職内定者に限って研修を受け入れましょうと。その就職内定者というのは、本当ならば、専門学校へ行って保育士の資格を取りたいのですが、経済的な事情からなかなかそれが難しいと。それで、保育士を、子育て支援ですとか、幼稚園とか保育所に入って、その時には子育て支援員の資格があるわけです。そこで園のほうで指導をしながら、保育士の資格取得の勉強が可能ということで、本当に人気があるということでした。でも、高校生がどうやって1日の研修を30時間の研修を受けられるのだろうと伺いましたら、何と、一期、二期とあって、二期は1月、2月なのですけれども、旭川市の子育て支援課が高校に行き、就職進路の担当教員と面会し、何とか公休扱いにしてくれということで実現したということです。実際にいろいろな研修を受けられまして、高校生達が資格を取る、保育士、働きながら専門学校に行かなくても保育士の資格がとれるという夢も実現できるということで、本当に素晴らしい取り組みだなというふうに思いました。

こんなふうな取組がどんどん広がって行って、オール北海道でこれから子育て支援を考えていければと、このことは本当に道と教育委員会とが一緒にならなければ出来ないことだと思いますので、ぜひ、これからも知事部局の知事、よろしく願いいたします。以上でございます。

○高橋知事 ありがとうございます。では、いくつかの教育委員の皆様方から大方先生のコメントを求めるお話もございました。大方先生にお話をさせていただいて、その後、今、鶴羽先生言っておられた子育て支援員研修、我々もいろいろ努力していますので、担当の粟井対策監にもコメントをしてほしいと思います。では、大方先生よろしく願いいたします。

○大方学長 ありがとうございます。いろいろ貴重なご意見ありがとうございます。あまり時間はありませんが、一つ考えられることは、まずこのIT化は私も基本的には大賛成なのですが、その取り入れ方なのです。依存しないということ。ある方が、2歳の子どもさん、三つ子の坊やを3人、私の研究室に連れてこられまして、iPadを3人とも持っておられました。つまり、おじいちゃんが「自分たちは苦手だが、これからの孫の時代はこれが良い」と言って、買ってくれたと言っていました。三つ子ができてお母さんは困

ったのですね。それは子どもが授かったことではなくて、どうやって育てるのか、人手もいるし大変だし、3人いると一緒に泣くしと。でもそのiPadを買ってもらったおかげで誰もしゃべらなくなり、誰も喧嘩をしなくなり、誰もうろうろしなくなったのです。子育て万歳というようなことで。やはり、その道具の素晴らしさということと、それが子ども今の育ちにとって何が大事かということですよ。本当に私とそのお父さんがしゃべる1時間、一切動きませんでした。3人並んで顔も見ませんでした。ずっと一人は一生懸命音楽を聴いて、一人の子は英語か何かやっていて、一人の子はずっと何かタッチパネルのような問題を解いていました。結論、賢くなった。こんな素敵な道具はない、とお父さんはおっしゃっていて、その時、私も言いようがなく、あんまり喜んでいらっしやるので否定もできず、そうですかみたいな感じで、でもそれではいけないと思い、そのことを否定するのではなく、そうではない育ちは必要なことです。しゃべる時期に誰としゃべっているのかなとか、この時期に葛藤したり喧嘩したり、折り合いをつけるということも今、非認知的能力と言われていますが、とにかく喧嘩もしたら親が止めてくるという時代になっておりまして、葛藤するということ、それでいて大学まで人間関係が問題で辞める理由も全て人間関係となってくるわけです。では、それはというと0歳からの人との関係性が、人間関係が大事です。その辺が、道具ということの素敵さと、人が人らしく育つ時の人間関係という、そこに情という、心地よい人との出会いというのを感じて、そこが上手く折り合いがつけば良いし、次、子育て支援とも関係がありますが、悪気なく信じているのですが、ネットの情報を信じるということは、やはり多いのかなと思うので、正しい情報をどう伝えていくかということが非常に重要です。例えば、コンピューターが出来ないことをするという、この思考力というのは、不思議だなあとか、何でこうなっているかなあ、この電気はどう付くんだろうとか、この水はどこから来るのだろうとか、そうしたことの当たり前さは、大人のちょっとした言葉がけにもあって、この水どこから来てるの？と、手を洗っている時に、一言、言ってくれる大人がいれば、不思議だねと、何で水が出るのかなと、そういうことが思考力の芽生えになります。そういうことの声をかけてくれる大人が、今なかなか家庭では難しくなり、ではそれは誰がやるのか、それは私達の責任となり、保育をやる人も、歌を唄ったり、絵を描いたりするのは、それも素晴らしいけど、そうではない生活の中の織りなす言葉をかけるということは、「対話」と言うとまた難しくなりますが、教え込みではなく、さりげなく、綺麗ねとか良い天気だねとか、日常の中で、今日は天気や洗濯干さなみたいなの、その予測する力なのです。今、小学校で困ってらっしゃるのは「ずつ」です。2つずつとか、半分とか、5番目とか、よく算数の1年生でも出てきて、ずつ、2つずつ丸をつけましょう。とか、論理、数学的思考の始まりですが、「ず」と「つ」と読むのですよ。何回読んでも「ず」と「つ」。5番めの子どもの帽子に丸をつけましょうも、「め」ではない「め」。読んだら「め」は「め」です。これを1年生の先生、説明しようと思ったら、論文100枚書いたって説明できません。「め」は「め」だし、「ずつ」は「ずつ」だし、「はんぶん」は、「は」と「ん」と「ぶ」と「ん」と読んで

はだめで、「はんぶん」は「半分」ですよ。でも兄弟がいたら、おまんじゅう半分にするとか、生きる知恵ですよ。一つしかない時どうする？という時に半分こしようかということが、心持ち、人との関係性であり、生きる知恵ですよ。それはロボットはしてくれない。こういうことが大事だというのは、ある種、こども園や幼稚園、保育園が子育てモデルの場所になっていき、そこにさきほどの子育て支援員さんも学び、こういうことが大事なのだよと、やはりモデルがないと、説明して上手くいくというわけではないのかなと思っています。

最後になりますけれども、子育てと言った時に、これは関西のおばあちゃんが、私は孫の嫁ですが、（おばあちゃん）も介護の一人でした。明治生まれで、認知症にはなりませんでしたが、その時に、小さい時に唄った歌を唄ってくれと言われて、孫の嫁ですが介護しながら唄った時に、それはもう108歳のおばあちゃんではなく、子どもの時のお母さんに唄ってもらった時の顔になるのです。そして懐かしいと言います。おばあちゃんにとってお母さんは8歳の時に亡くなっているので100年前ですが、おばあちゃん天国で誰に会いたいなどと聞くと、おじいちゃんである夫とか子どもは先に死んでいるのですね108歳にもなると。ですが、100年前に病気で亡くなったお母さんに会いたいと言うのです。そして家に帰してくれと。いや、おばあちゃん、この大方さん家にもう90年住んでいるけど、18で嫁にきたと思うのですが、ここは家じゃないと。つまり、生活生活と言うけれど、生活というのは理屈ではなくて、その人にとって心地良かった場所、人との出会い、それこそが情であって、そういうことが、私はただ自分の子どもに言ってもらえるか、こんな仕事していますが自信もなく、その当時何もなかったのに、もちろん全ての人がそうであったとも言えませんが、何か蚊帳というのでしょうかね、中に寝かされたとか言っていましたけれども、そういうことの人温もり感が物とか何とかではない中であって、それはやはり時代が変わっても、特に災害とかがあればあるほど、何も無くなった時に最後に残る人との関係性というものが、どこで育てるかといえば0発信です。ただそれをお母さんにやりなさいというと、母性神話になってしまうだけのことなので、そうではない教育的配慮としての擬似的なことが保育としても必要ですし、家庭に対する支援としても、単なるサービスということだけではなく、本質的なことをどう家庭教育としておろしていくかということが、今後求められるのかなと思っています。

○高橋知事 よろしいでしょうか。ありがとうございました。では栗井さんどうでしょうか。

○栗井対策監 どうもありがとうございました。先ほど、子育て支援員のお話が鶴羽委員から出ました。非常に有効な取組を紹介していただきました。旭川が特にそうですね。

今、旭川市、江別市、富良野市でこういった研修を実施しておりますが、道も先行して全道域を対象に研修を開催してきております。これまで、受講の希望者数を把握しつつ、募集定員の拡大も図ってきました。また、市町村へ実施についての働きかけを行ってきま

した。こうした研修の充実に取り組んできたところ、おかげさまで、この3年間でこの研修の受講者が道と3市合わせて1,300名程度となりました。うち、地域保育、いわゆる保育事業に対応する研修コースの修了者も約450名全道で受けてくれております。今後、こうした取組に加えまして、研修の実施時期や内容に関する受講者のニーズ、また研修終了後の就業動向も把握するなどして、一層、道の効果的な研修の体制に努めてまいりたいと考えています。

○高橋知事 ありがとうございます。教育長いかがですか。

○佐藤教育長 はい。0スタートということ、最初、先生の言ってる意味がよくわからなくて、聞き間違えかなと思っていたのですが、その0スタートということの意味、それから、科学的な根拠というべきなのか、その理屈というのを今日聞かせていただきまして、非常に私自身なるほどなというふうに思いました。

実は、これは個人的なことなのですが、私の姪がつい2、3日前に子どもを産みまして、明日退院をしてくる、すぐ私の家の側に来ることになって、まるで孫が出来たような状態に今なっているのですけれども、私個人的には間に合ったなという感じがします。ですから、こういった情報というのが、どういうふうに全道に伝えていけば良いのかとか、先ほど山本先生もおっしゃっていただいた幼児教育を語る会というのを、これ14の管内でそれぞれ実施をしているものなのですが、こういう情報交換の場に、こういう0からの保育の重要性だとか、ただ、大方先生もおっしゃったように、それを家庭に任せると言っちゃうとまたどうしても偏ってしまうということがあるのでしょうから、そういったものをオール北海道でこれからやっていくために、どうしていけば良いのか、それはその教育という私どもの理論だとかいろいろなことをするところと、それから実際にその認定こども園なり何なり、知事部局のほうの部局と、今それらが一体となって進めていこうと、先ほど鶴羽先生もおっしゃっていただいたけど、そういった形で昨年からは進み始めていますので、そういった中で、我々全ての関係する部局と一緒に、今おっしゃっていただいたような0歳児からの保育の重要性であるとか、そういったものをその理屈を説明したら、かなりの方が、先ほど先生もおっしゃったようにかなりの親御さんなりになるほどと、それは確かに積み木持たなきやいかんとかというのは、理解してもらえらると思うのですね。そういった周知活動であったり、そういったことを伝える。そういうことを指導する体制というものを整備していくことが大切だなと。そのためには、今以上に教育部局と知事部局が一体となって一つの問題に取り組んでいくということが大切だなというのをあらためて思いました。今日は本当にありがとうございました。

○高橋知事 ありがとうございます。あつという間に時間が経ってしまいました。最後に私も子育てを経験した母親の一人として、一言、先生に御礼を申し上げたいと思います。反省すべきことが多くあったなということを振り返っておりますが、もう息子達も30代になりまして、嫁もとっておりますし、何を言う立場にはなくなりましたが、反省をしながらお伺いしておりました。そして、先生のお話を通じまして、幼児期における人間関

係の構築ということの重要性、しかしながら一方でお母さんを含めて、私もそうでしたが、働かなければ、働きたいというか、働くということが常識となったこの世の中で、先生のお言葉を借りれば、サザエさんの磯野家の果たしている機能なり、その効果ということの要素というものを一つ一つブレイクダウンをして、それをいかなる形で親があるいは保育の現場、あるいは幼児教育の現場が子どもに与えていくかということをお話だと認識をいたしまして、やはり保育、あるいは幼児教育の質の向上ということの重要性ということを改めて認識をさせていただいたところであります。その意味では、冒頭の坂本部長からのご説明の中で指針の策定を今パブリックコメントも求める形で固めていこうと思っているところであります。今日、大方先生そして教育委員の皆様方からいただいたご意見をしっかり踏まえながら、この指針策定に活かしてまいりたいと思う次第であります。本日は誠にありがとうございました。

(了)